



保育士・幼稚園教諭向け



実践に活かす

気になる子への支援ガイドブック



彩の国  埼玉県

保育士・幼稚園教諭のみなさんへ

日ごろ、子どもたちの保育に従事している保育所、幼稚園の先生方に感謝申し上げます。

皆さんの日々の保育が、子どもたちの将来につながることについては改めて申し上げるまでもありませんが、特に発達障害のある子どもには、障害特性に合わせた支援が社会生活の基礎をつくるこの幼児期に大切だとされています。

埼玉県では発達障害の早期発見・早期支援の促進を目的にこれまで様々な施策を実施しています。早い段階で気づき適切な発達を促すことで、現在または将来の生活上の困難さが軽減できることから発達障害の理解・啓発は最重要課題となっています。何より保育所、幼稚園に通う時期の発達のみならず、その後の発達ステージにおいて大きな影響を及ぼすことになります。しかし発達障害は、障害があることが一見して分かりにくく、行動から原因や背景を推測し、困っている子どもの気持ちに寄り添った対応を工夫していく必要があります。

また、保育士・幼稚園教諭のみなさんから、気になる子どもの行動の原因は何か、それは発達障害に起因するものなのか、その場合どう対応していけばいいのか、発達障害のある子に他の子どもと同じ接し方で良いのかといった切実な声を多くいただいております。

そこで、このたび埼玉県では、保育士・幼稚園教諭のみなさん向けに、発達障害をはじめ、子どもたちの特性に応じた適切な対応を促すためにガイドブックを作成し、埼玉県内の保育所・幼稚園・地域子育て支援拠点などの先生に配布することにしました。

このガイドブックでは、園での集団行動から見た気になる子どもへの対応のヒント、個別の行動への特性に配慮した支援の方法、さらには専門家からのアドバイスなどを通して、子どもの行動には理由があることやその子に合った適切な支援について学べるようになっています。

見ただ目で分かりにくい特性の子どもたちだからこそ、幼児期からの正しい支援が必要なことを常に意識していただきたいと考えています。ぜひこのガイドブックを折にふれ開き、保護者や仲間の皆さんと話し合いながら役立てていただければ幸いです。

この冊子が、園で活用され、子どもたちの健やかな発達に役立つことを希望しています。

平成 23 年 10 月

埼玉県

目次

保育士・幼稚園教諭のみなさんへ

子どもに寄り添うとき いつも意識しておきたいこと…………… 2

園での場面から：この子は何に困っているの？

～理由の見立てからその子に合った支援を

- ① 登園 1（引き渡し） 一朝、親から離れられない…………… 4
- ② 登園 2（身辺整理） 一荷物を決められた場所に置けない…………… 5
- ③ 自由遊び 一みんなと一緒に遊ばない…………… 6
- ④ 朝の会 一お話を聞くときじっとしてられない…………… 7
- ⑤ 設定保育（工作） 一みんなと一緒にやろうとしない…………… 8

コラム【園での体制作り】【家庭との連携】 《親の思いは…①》…………… 9

- ⑥ お出かけ（園外保育） 一集団から離れる…………… 10
- ⑦ 食事 一好き嫌いが多い…………… 11
- ⑧ お帰りの会 一帰りたがらない…………… 12
- ⑨ トイレ 一トイレで用が足せない…………… 13
- ⑩ 発表会・運動会（行事） 一練習をいやがる…………… 14

コラム【発表会・運動会】 《親の思いは…②》…………… 15

図解：子どもにやさしい環境の設定の例…………… 16

子どもの行動から：Q & A どうすればいいの？

～特性の理解と正しい対応を

- Q ① あいさつをしない子…………… 18
- Q ② 遊びのルールを守れない子…………… 19
- Q ③ ウロウロする子…………… 20
- Q ④ たたいたり、けったりする子…………… 21
- Q ⑤ トイレに行こうとしない子 《親の思いは…③》…………… 22
- Q ⑥ 順番にこだわる子…………… 23
- Q ⑦ おとなしすぎる子…………… 24
- Q ⑧ 通園バスの座席にこだわる子…………… 25
- Q ⑨ 他人の物を持ってきてしまう子…………… 26
- Q ⑩ パニックを起こす子…………… 27

専門家からのアドバイス

■ 医師、臨床心理士、言語聴覚士、作業療法士、保育士…………… 28

サポート手帳について、医療機関・療育機関へのつなぎ方…………… 32

あとがきにかえて

資料：関係機関一覧

子どもに寄り添うとき いつも意識しておきたいこと ……

1 困っている子どもの気持ちを知る

* 「困っているのは子ども」
という視点で考える

* 障害の有無で
子どもを見ない

子どもはどんなことに困っているの…

- 感覚が過敏 (におい、音、接触)
- 分からなくて不安
 - ・これからどうなるか分からない
 - ・ここがどういう場なのか分からない
 - ・どこに何を置けばいいのか分からない
 - ・今、何をすればいいのか分からない
 - ・遊びたくてもルールが分からない
 - ・自分の体の動きが、自分で意識できない
 - ・先生の話が分からない
 - ・「終わり」が分からない
- みんなと一緒にだと落ち着かない
- 食べられる物が無い
- 言いたいことが言えない…

2 子どもの気持ちを受け止める

* なぜそのような行動を
するのか考える

* 発達のレベルを知る

* 育てにくい子どもを育てている
親の大変さを理解する

* 親の気持ちに寄り添う



この冊子の使い方

子どもの気になる行動には背景があり、理由があります。しかし発達障害は障害があることが一見して分かりにくいので、行動を良く観察し、そこから原因や背景を推測し、そして困っている子どもの気持ちに寄り添った対応を工夫していく必要があります。右を参考に各ページを必要に応じて活用してください。

園での場面から：園内の場面をもとに子どもの行動から原因や背景を推測し、原因の見立て（仮説）を複数示している。子どもの気持ちに寄り添った対応をするための、園での「環境設定の工夫のヒント」や保育者の「関わり方のヒント」を示している。「環境設定の工夫のヒント」の実例について、P16・17のイラストも合わせて参考にしてほしい。また対応、背景等に関して各分野の「専門家からのコメント」を掲載した。そこでは設問とは別の行動を示す場合についてのアドバイスを併記するようにした。

「家庭との連携のポイント」として園から家庭への働きかけの参考に、家庭のことで聞いておいた方がよいこと、家庭でも取り組んでもらいたいことを記載した。

子どもの行動からQ&A:子どもの個別の行動について、現場から多く出された疑問を取り上げた。一つの事柄でも複数の背景等を考え、仮説を立てて、対応を考える方式をとっている。

専門家からのアドバイス:発達障害の子どもと関わるうえでの留意してほしいことを、それぞれの専門的な立場から説明している。

子どもたちにとってあなたは、将来を左右する大事な大人の一人です。一番困っているのは子ども自身であると考えことからスタートです。ここに書いてある4つのステップを意識しながら、このガイドブックを使ってください。くり返しくり返し日々意識していると、どんな状況でもその子その子に合った接し方を見つけられるようになるでしょう。子どもと共に育つことをぜひ実感してください。

3 その子に合った工夫をする

- * 自分たちの都合の良い方法ではなく、子どもにとって良い方法を考える
- * その子に分かる伝え方を工夫する
- * 子どもたちが自ら行えるようになるための方法を工夫する
- * ゆっくり発達する子に合わせた方法を探す
- * 保護者と連携しながら、その子に合った方法を探す



4 子どもと共に育つ

- * 事例から、現実の場面の仮説をたて、解決する力をつける
- * 自分たちのレベルを高める
- * 工夫はみんなのためになる
- * ポイントを知れば、保育にあたるにもゆとりができる



園の子どもへの関わりを支援する県の施策を紹介します

発達支援マネージャー	市町村で、発達障害のある子どもへの支援の中心的な役割を担う者で1名以上配置されています。保健、福祉、教育等各機関との連携を図るに当たり、発達支援マネージャーと協力してください。
発達支援サポーター	園において、子どもへの支援の中心的な役割を担う者です。子どもへの支援を園全体で取り組む際に指導的な役割を担えるように研修等を県が実施します。
サポート手帳	子どもの成長と現状を正しく引き継ぐためのツールです。使い方など詳しくはP32をご覧ください。サポート手帳について http://www.pref.saitama.lg.jp/site/hattatu/#lifestage

園での取り組みを支える仕組みの詳細は、以下のHPで見ることができます。

発達障害全般について <http://www.pref.saitama.lg.jp/site/hattatu/>

園での場面から

1

登園 1

引き渡し

この子は何に困っているの？～理由の見立てからその子に合った支援を

お母さんから離れられなくて泣いているのはなぜ？

子どもが困っている原因を考え、仮説をたてる

＊ お母さんから離れることは子どもにとっては環境が変わること。それで不安なのかも？

● ほかに…

- ＊ 感覚が過敏でざわざわした音が不快なのかも？
- ＊ これからどうなるのか、ここがどういう場なのか分からず不安なのかも？

支援のポイント

子どもが安心できる方法を考えます

環境設定の工夫のヒント

- 静かに落ち着けるスペースを用意します。(P17 A参照)
- 母親のお迎えの時間を教えます。

関わり方のヒント

- 子どもの気持ちに添った声かけをします。
- 気持ちを切り替えられるようその子の好きな遊びに誘うなどします。

家庭との連携のポイント

- 普段や今朝までの様子を聞きます。
- 生活記録を共有します。(起床、食事、トイレ、就寝、服薬、体温)
- その日の天候も記録しておきます。



短く、穏やかな声で。肯定的に。

専門家からのコメント

作業療法士から

なかなか母親から離れられない子

泣くのは不安があるからと考えられます。いつもと違う環境、またほんの少しの環境の違いにも不安を抱く子どもがいます。例えば「カレンダーが次の月のものになっていた」「壁にあった絵がはずされていた」などささいに思えることでも不安になり泣いてしまう子どもがいます。また、触覚過敏の子どもは、例えば信頼できる母親に抱かれていることで安心できますが離れることには不安を感じます。その結果泣いてなかなか離れられない場合もあります。子どもの泣いている原因を把握することが重要になります。

医師から

親から離れて平気である子

おとなしいからといって、放っておいてはいけません。親から離れる不安や新しいところへの不安がなく、園にあるおもちゃに突進して行くようなお子さんは、人への認知や場所の理解ができていないのかもしれないかもしれません。この時期は、親子の「愛着形成（この人が安心できると理解すること）」が大事な時期です。家庭での様子など保護者に聞いてみましょう。保護者もその対応に困っているかもしれません。人への関心を高めるために、遊び方を工夫するなど一緒に楽しいこと、うれしいことを共有することが大切です。

園での場面から

2

登園 2

身辺整理

この子は何に困っているの？～理由の見立てからその子に合った支援を

リュックを決められた場所に
置けないのはなぜ？

子どもが困っている原因を考え、仮説をたてる

*どこに何を置けばいいのか分からないのかも？

●ほかに…

- *他に興味がある物があるのかも？
- *今何をすればいいのか分からないのかも？

支援のポイント

決まった場所にいつも置けるよう、その子が自分でできる分かりやすい工夫を考えます

環境設定の工夫のヒント

- 持ち物と置く場所に同じマークをつけます。(P17 B参照)
- 手順と場所が分かりやすいように絵や写真を使います。

関わり方のヒント

- 手順表を見せながら手順を伝えます。(P8 イラスト参照)
- 指示は、動作に言葉を添えます。
- その都度「できたね」とほめます。

家庭との連携のポイント

- 家庭と園で同じマークを使用します。
- ひとつでも子ども自身で持ち物の準備ができたならほめてもらいます。



「A太ちゃんのチューリップはどこかな・・・？」

専門家からのコメント

臨床心理士から

持ち物を放って遊びに行ってしまう子

いろいろなことや物に興味が高く、遊びたい気持ちがとても強いようです。そのような子どもは行動することがとても速いため、関わる先生はいつも子どもが行動した後に声をかけたり、子どもの動きを制止したりすることが多くなってしまいます。そのような対応が続くと、子どもの方は「先生にしたいことを止められた」「邪魔された」というような気持ちになってしまうことがあります。大人が子どもの行動の予測をして、できるだけ行動する前に対応する（「タオル出そうね」などと穏やかに声をかけるなど）ことを心がけましょう。

医師から

何をして良いかわからず、ぼーっとしている子

このような場合、子どもが登園してからの流れを十分理解していないのかもしれませんが。その時は、「〇〇ちゃん、靴を脱ごうね、下駄箱に靴を入れようね」と声をかけて、一緒に動作をしながら登園後の流れがはっきりと理解できるように関わることが大切です。また、自分の靴を入れる場所が分からなくてとまどっている場合もあるので、「どこに〇〇ちゃんのお靴を入れたらいいのだろうね」と声をかけながら、その場所に誘導してあげることも大切だと思います。「××しなさい」等の命令的・指示的な口調は極力避けるようにしましょう。

園での場面から

3

自由遊び

この子は何に困っているの？～理由の見立てからその子に合った支援を

自由時間なのに、みんなと一緒に遊ばないのはなぜ？

子どもが困っている原因を考え、仮説をたてる

*一緒に遊びたいけど、遊びに入れないのかも？

●ほかには…

- * みんなと遊ぶことに無関心なのかも？
- * 今、何をすればいいのかわからないのかも？

支援のポイント

子どもの興味や発達に合った遊びを考えます

環境設定の工夫のヒント

- 遊びをコーナーごとに分けることで、自分で遊びが選択できるようにします。
- 場所、物、ルールを分かりやすくします。
- 時間が分かるような工夫をします。(P16 C 参照)

関わり方のヒント

- 保育者との1対1の遊びを通し、他者と一緒に遊ぶ楽しさを経験させ、少しずつ他児との関わりにつなげます。
- 遊びへの入り方や遊び方のモデルを見せます。

家庭との連携のポイント

- 園でどのように遊んでいるかを伝えます。
- 子どもと関わって保護者も楽しいと思えるような体験を重ねられるよう手助けします。



「一緒にやりたいときは『遊ぼう』っていうんだよね。」

専門家からのコメント

言語聴覚士から

友だちと遊びたそうにしているが入れない子

他の子どもと関わりたい様子ならば、「遊ぼう」「いれて」「かして」「いーい？」など便利で短い言葉を教えてあげましょう。ふだん文で話せていても、同年齢の子どもとのコミュニケーションには短い言葉の方が容易です。字を見せてもらうと、さらに自信をもって言える子どももいます。最初は実際の場面で「『遊ぼう』だよ」と大人がキューを出してあげましょう。「お友だちと遊びたいときは『いれて』って言うのよ」と前もって教えていても、いざ必要な場面では言えない子どもが多いのです。「いやだ」「やめて」など拒否を表明する言葉も、安心して仲間と生活するのに大事です。

臨床心理士から

一人で黙々と遊んでいる子

他の子どもと遊べるように支援していくことはとても大切です。しかし他の子どもと遊ぶためにはいくつかの段階があるようです。現段階ではもしかすると、興味を持てる遊びが少ない、人と一緒に遊ぶことが楽しいという経験を十分に積むことができていないのかもしれないかもしれません。そのような子どもに対しては、いろいろな遊びを提案して、子どもが一人で遊べる遊びを増やすこと、または先生と一緒に遊ぶことから始めましょう。その際は、できるだけ言葉のやりとりをあまり必要としない、子どもが興味を持っている遊びから始めましょう。

園での場面から

4

朝の会

この子は何に困っているの？～理由の見立てからその子に合った支援を

大切なお話をしているときも じっとしてられないのはなぜ？

子どもが困っている原因を考え、仮説をたてる

*** 目に入ったものや耳に入ってくる音のために
落ち着かないのかも？**

● ほかには…

- * 他のことに興味があるのかも？
- * 話が分からないのかも？
- * 自分の体が動いていることが、自分で意識できにくいのかも？

支援のポイント

周りの余計な刺激を避け、他に注意が向かわないようにします

環境設定の工夫のヒント

- 注目がそれて、ほかに注意が向いてしまうような物は見えないようにします。
- 「今、何をする」「これから何をするのか」が分かるカードや物を用意します。
- 先生の近くの席にします。

関わり方のヒント

- 身体を一度動かすと落ち着くので、例えば仕事を与えて動ける時間を作ります。
- 子どもが先生に注目していることを確認してから話します。

家庭との連携のポイント

- 話をするときは、子どもの注意を向けさせてから話をするようにしてもらいましょう。
- 家庭と園でそれぞれの工夫を伝え合いましょう。



話す内容を予告します。

専門家からのコメント

作業療法士から

じっとできない子

いくつか原因が考えられます。見えている物、動いている物、また色々な音や、ほんのわずかな新しい音にその都度、無意識に注意が向いてしまい、落ち着きがなくなってしまう。あるいは空間の中で体が動いたときに感じることでできる刺激や体を動かしたときに筋肉関節から今どのように動いているのかを感じることでできる刺激が脳が感じ取ることが難しいお子さんはその刺激を脳が求めるので結果として、走り回る、その場でくるくる回る、席を離れて教室から出て行ってしまふなどの行動が見られます。これらの見立てを正しく行うことで支援の方法が見えてきます。

言語聴覚士から

長い文だと聞き取れない子

クラスの集まりの時に、先生や友だちが話していることを聞いていない子どもは「聞こうとしていない」のではなく、話の内容が本当に分からない場合があります。生活場面での指示であれば周囲の様子を見ながら適切に対応できる子どもでも、朝の会のような文章レベルの言葉と言葉のやりとりでは、意味が分からず席を離れてしまうのです。短い文で説明する、絵や写真を見せながら話すと分かりやすいでしょう。時には耳の間こえが悪いこともあります。雑音の多い集団場面では、わずかな間こえの悪さが聞き取りを阻害します。幼児の聴力検査ができる耳鼻咽喉科の受診を勧めましょう。

園での場面から

5

設定保育

工作

この子は何に困っているの？～理由の見立てからその子に合った支援を

今日はみんなで工作をしようと言っても、やろうとしなのはなぜ？

子どもが困っている原因を考え、仮説をたてる

* 何をするのか分からないのかも？

● ほかには…

- * 課題が本人に合っていないのかも？
- * みんなと一緒にだと落ち着かないのかも？
- * 上手にできないのが嫌なのかも？

支援のポイント

今からすることを絵などを使って示します。得意なこと、好きなことを取り入れます

環境設定の工夫のヒント

- 手順表を用意し、その子の手元に置きます。
- 活動に必要な物だけ机の上に出します。
- 完成見本を最初から飾っておきます。

関わり方のヒント

- 一つの工程ずつ教えます。
- 特に苦手意識が強い場合には、一緒に作ったり、手助けをします。
- 成功体験で終わるようにします。

家庭との連携のポイント

- 作品のできあがりにとらわれず、子ども自身が作品を作ったことそのものを認めてもらいましょう。
- 子ども自身の「できた」という達成感の積み重ねが成長につながることを伝えましょう。



「今日はこの順番で作ろうね。」

専門家からのコメント

作業療法士から

指示が理解できない子

言葉で指示されても、その言葉が理解できなければ行動に移せません。もしある言葉を言えたとしても、その言葉の意味を理解していない場合があります。コミュニケーションのツールとして言葉を使えることが重要です。実際に言葉と一緒に体験したことを脳が受容し、その積み重ねで学習していきます。経験してもその経験によって得ることのできる感覚刺激を脳が受容できなければ、その場に合った言葉の使い方ができません。

またぎこちない動きも、身体イメージや体をどのように動かすのかなどの運動企画能力が未熟で、目的に合った動きができないためです。

医師から

勝手な行動や、言ったことと違うことをする子

わがままで、マイペースで、頑固と先生たちには見えるかもしれませんが、行動の原因は、認知の偏りがあるため言われていることが分からない（言語理解が悪い）、言われたことを誤解する（社会性の障害、想像力の障害、記憶の悪さ、注目点が違う）などが考えられます。そのため、情報を伝える工夫が必要です。説明の時にはカードを添えたり、短く区切って指示してあげたり、ていねいに教えてあげてください。そうしていくと一番子どもが変わる点は、自分ができたという達成感です。ぜひ、色々な工夫をして、達成感をたくさん経験させてあげてください。

園での体制作り

発達障害のある子を園全体で支援します ～保育・支援の基本的考え方

障害のある子への支援は、まず一人ひとりの特性、発育状況を知り、その子にあった支援を園全体で一貫性をもって、家庭と協力しながら行うことが大切です。担任のみに責任を負わせるのではなく、園で組織として体制を作ることが大切です。

発達障害の特性やその支援のポイントを全職員が理解し、園としての支援体制の確立を図るために、園にい

る発達支援サポーターなどを中心に、支援方法を検討します。うまくいった例（そのときの声掛けはどうだったかなど）、だめだったとき（そのときの状況はどうだったかなど）を、一人ひとりをよく見て、記録し、アセスメントし、具体的な対応の成功例を積み上げ先生同士が実態を把握していくと良いでしょう。

家庭との連携

保護者の気持ちに寄り添い、情報を共有しながら、 対応を工夫し子どものもつ可能性を伸ばします

子どもの行動の気になるところについて、園側と保護者の認識が同じとは限りません。

周りとのコミュニケーションの難しさ、こだわり、不器用さ、感覚過敏などで集団のなかで子どもが苦勞していても、保護者はその子の個性ととらえたり、成長するうちに解決できると考え、いま支援の必要はないと考えてしまうことがあります。また、指摘を不快と感じることがあるかもしれません。しかし何よりも子ども自身が苦勞していることを伝え、子どもが社会に参加できる幅を広げるために、幼児のうちから、園と保護者が本人に合った方法を工夫しながら対応していくことが大切だということを理解してもらうようにしましょう。

また、実際には対応に苦勞していても、親として子どもの実態に楽観的でありたいという気持ちにも十分配慮

し、子どもの良い点をあげ、「お子さんの可能性を伸ばすために一緒に考えていきましょう！」と保護者に寄り添う姿勢が何より大切です。

まず、集団での様子を具体的に伝える場面を作りましょう。行事の時ではなく、通常保育の様子をていねいに見てもらうことが大切です。同様に、家庭での子どもの様子や、家庭での工夫なども聞いて情報を共有します。

保護者は、具体的な対応方法を知らないだけかもしれませんが。園での工夫を伝え、家庭と園で同じ対応をしていきます。

園と協力して子どもに合った方法で一貫した支援を日々積み重ねていきましょう。そして、子どもの成長を促すということを実感してもらいましょう。

親の思いは…①

園と協力することでこのような子どもには・・・

保育園に通うようになって、まず担任の先生に提案されたのが、「連絡ノート」の交換です。そのノートには、園での息子の様子や家庭の中で悩んでいることを書いて、担任の先生と息子の対応を一緒に考えていきました。そのおかげで、ひとりで悩みを抱えずにすみ、非常に心強かったです。

また、保育園では先生たち用の「連絡ノート」が作られ、毎日、すべての先生が息子の状態を理解してくださり、声のかけ方や対応も園の中で統一され、息子もとても安心して過ごしていました。園に行くときの先生からもお声かけをいただき、「支えられている」ことを実感できました。また、園の先生が息子の療育の場に時間を作って足を運んでくださったり、「学ぼう」「知ろう」という先生方の姿勢が親として子育てに向き合う気持ちを支えてくれたのだと思います。

園での場面から

6

おでかけ

園外保育

この子は何に困っているの？～理由の見立てからその子に合った支援を

いつもと違う場所にいくと、 集団から離れてしまうのはなぜ？

子どもが困っている原因を考え、仮説をたてる

*** これから起こることの予想がつかなくて不安なのかも？**

● ほかには…

- * 気になる物が目に入り、その場を離れるのかも？
- * 触覚刺激に過敏で手をつなぎたがらないのかも？

支援のポイント

具体的な活動がイメージできるよう事前学習をします

環境設定の工夫のヒント

- 急に道路に飛び出すなど、予測される危険な行動に注意します。
- 不安にならないよう園外保育の流れを絵や写真で時系列に並べて見せ、見通しが立つようにします。

関わり方のヒント

- 日頃の行動を観察し、どのようなときに集団を離れるのか把握しておきます。
- 園外に出る前に約束ごとを確認しておきます。
- 出かけた先では関心が他のところにそれそうになったら、声かけします。

家庭との連携のポイント

- 関心が向かいそうな物、苦手な物を確認します。
- 事前にどのような場所かを保護者に伝えたり、保護者と子どもと下見に行ってもらったうえで、保護者の視点での留意点を教えてもらいます。



「お水のところにはいかないよ。」

専門家からのコメント

医師から

新しい場所が苦手な子

日常と違った行動をしようとする時、周囲の状況を的確に認知する力が弱い子は恐怖心や不安感でパニックを起こすことがあります。いつもと違った場所に行く場合は、前もって何度もその日の流れや目的地を写真やイラストなどを使って分かりやすく説明することが大切です。また、無理なスケジュールは立てないこと、そして“子どもが不安や恐怖に苛まれているかもしれない”との眼差しで小さな変化を見逃さないで、早めの対処をすること。パニック時は、子どもを決して責めないこと、そして安全な場所でその子が落ち着くまで見守ってあげてください。

作業療法士から

手をつなぎたがらない子

衝動性のある子どもは見える物、聞こえる物に興味を持った瞬間にその方向に意識がいきますが、それが離れていればその方向に向かおうとします。これは「あれはなんだろう」と思ったときには動いてしまって、脳の中で行動に移す前に思考することができない状況です。そのような子どもにとっては手をつないだら動けなくなるので手をつなぐことを嫌がるかもしれませんが。触覚過敏の子どもは触覚防衛反応から攻撃を加えることもあります。そのくらいに子どもにとっては不快刺激であるということになります。

園での場面から

7

食事

この子は何に困っているの？～理由の見立てからその子に合った支援を

好き嫌が多いのはなぜ？

子どもが困っている原因を考え、仮説をたてる

* 味覚が過敏なのかも？

● ほかには…

- * 見た目（形、色）にこだわりがあるのかも？（丸い物、白い物など）
- * 食べ物の温度にこだわりがあるのかも？
- * においが苦手なのかも？

支援のポイント

感覚の過敏に配慮します

環境設定の工夫のヒント

- 無理強いせず、その子が食べきれぬ量をお皿によそいます。
- 給食の場合は、同じ食材でも調理法を変えたり、食材別に分けてあげたりします。

関わり方のヒント

- 苦手な物を無理強いせず、「残していいよ」と声をかけます。
- 小分けにして、少しでも食べることができたら、ほめてあげます。
- 子ども自身が食事は楽しいものと感じられるようにします。

家庭との連携のポイント

- 好き嫌いや同じ食材でも調理の仕方を変えると食べられるというような家庭での工夫を聞いておきます。
- 園で食べられるようになった物を家庭に伝えましょう！



専門家からのコメント

医師から

感覚過敏による偏食の子

感覚過敏は子どもにとって大きな問題で、偏食の原因になっていることがあります。大人と同じ形態の食事が食べられるようになるには、無理をしないで段階付けて慣らす必要があります。これは口腔内の摂食機能の発達には段階付けがあるからです。例えば自分の指や足、玩具など何でも口に持ってくる口唇期という時期を経て次の発達へ準備します。このようなことからくる過敏さを慣らしていくには、本人が受け入れられる異物（食事）を無理のない範囲で少しずつ増やしていくことが大事です。

教育の専門家から

こだわりによる偏食の子

子どもの偏食は、一般的なわがままではなく、好きな物、決まった物にこだわりがあったり、食感の過敏さから起きている可能性があります。複数の食材が混ざることが嫌だと感じている場合もあります。小分けにしたり、食材を別々の皿に分けてあげたり、量や食材を「どっちを食べる？」と選択させたり工夫してみましょう。また、周りの子どもたちや保育者がおいしそうに食べている様子を見せて興味を持たせるのも良いでしょう。家庭との連携を大事にしながら、スモールステップで、無理強いせずに取り組みしましょう。

園での場面から

8

お帰りの会

この子は何に困っているの？～理由の見立てからその子に合った支援を

いつまでたっても 帰りがらないのはなぜ？

子どもが困っている原因を考え、仮説をたてる

*「終わり」ということが分からないのかも？

●ほかには…

- * 何をすればいいのかわからないのかも？
- * やりたいことがまだあるのかも？
- * ざわざわしているのか嫌なのかも？

支援のポイント

・終了の仕方＝片付けの仕方を分かりやすくします

環境設定の工夫のヒント

- 他の園児と一斉にせず、その子のペースで取り組むことができますようにします。
- 荷物確認ができる絵カード等を使い、帰りの支度を一人でできるようにします。

関わり方のヒント

- 終わりの時間になる前に「もうすぐ終わりだよ」と予告しておきます。
- 「時間だから片付けようね」「○○ちゃんが自分で終わりにできたらうれしいな」「バスに乗って帰るよ」とおしまいが分かるように声かけをします。

家庭との連携のポイント

- 園での持ち物の確認方法を伝えましょう。
- 帰宅後、親子で持ち物を必ず出して片付けながら確認してもらいましょう。
- 行動の切り替えができればほめてもらいましょう。



「そうだね、帰りのバスに乗る時間だね。」

専門家からのコメント

医師から

切り替えが悪くなかなか帰りがらない子

物事の終わりが分からず、やっていることをそのまま続けてしまう特性がある子は、特に何かに没頭して遊んでいる時は場面の切り替えは大変困難です。

そのような場合、場面転換の時であることを子どもが無理なく分かるように、言葉のみでなく音や絵カード、動作などを用いて伝える工夫が必要です。また、帰宅準備が無理なく習慣化できるように場面設定をしてあげることも大切です。「早くしなさい」との叱責や「バスに乗り遅れるよ」との否定的な言葉かけは避けましょう。そして、うまくできた時にはしっかりほめてあげることが大切です。

臨床心理士から

身支度ができない子

何からどのように始めたらいいのかその手順が分かっていないのかもしれませんが。そのような子どもには一番始めに何をすればいいかだけ伝え、それができたら次にすることを伝え、一つずつ順に伝えていきます。手順書を作って見せながら伝えるのも良いでしょう。他にも例えばタオル掛けからタオルを取る際に、タオル掛けのところ人が密集していて、その場所を避けようとしている子どももいます。本人なりにタオル掛けの周りが空くのを待っているのです。班ごとに順番を決めて、子ども同士がぶつからないようにしても良いでしょう。

園での場面から

9

トイレ

この子は何に困っているの？～理由の見立てからその子に合った支援を

5歳になってもトイレで 用が足せないのはなぜ？

子どもが困っている原因を考え、仮説をたてる

***手順が分からないのかも？**

●ほかには…

- * したくなくても伝えられない？
- * するときに分からないのかも？
- * 園のトイレが嫌なのかも？

支援のポイント

ていねいに、根気よく、スモールステップで教えます

環境設定の工夫のヒント

- トイレの高さや大きさが子どもに合っているか確認します。
- トイレの使い方は絵や手順表などで子どもに分かりやすく示します。
- トイレトペーパーの1回に使う長さを図に示すなどします。

関わり方のヒント

- 子どもの様子をよくみて、決まった時間にトイレを促しましょう。
- 基本的なマナー、例えばトイレ以外の場所では服をおろさないことなどを教えます。

家庭との連携のポイント

- 家庭での工夫、園でうまくできた取り組みを互いに伝えましょう。
- 失敗しても怒らないように話します。
- わずかな時間でもトイレに座れたなど、少しでもできたらほめてもらいましょう。



専門家からのコメント

教育の専門家から

トイレができない子

年齢相応にトイレの習慣がついていないと本人の社会生活に大きな影響を生じる場合があります。知的にはそれほど遅れがなく会話もできるのに、高校生になってもオムツをしている生徒がいました。そのことが、その生徒の生活や社会自立に大きな支障となったことは言うまでもありません。排泄やトイレの指導は、「そのうちに行けるようになるだろう」、「発達に遅れがあるからきちんと教えるのは無理だ」と安易に考えることはとても危険なことです。早期からていねいに分かりやすく指導することが大切です。トイレの手順や、きちんと便器にすること、ズボンを下げすぎないことなど根気よく身に付けさせます。

臨床心理士から

トイレが恐いと感じている子

トイレのドアや壁、スリッパなどに好きなキャラクターが貼ってあったり、おしっこやうんちができなくてもトイレに行けたことを褒めてもらえる、徐々に緊張感も和らいでいきます。子どもが安心できるトイレの環境と、大人の関わり方を見直してみましょう。また、記録をとることで、子どもの排泄リズムを個別に把握し、タイミングよくトイレに誘うことが成功する確率を高めるコツです。

医師から

医療への連携が必要な場合

まれな例ですが、パンツの中いつもウンチを少しずつしてしまう子は、場合によっては治療の必要な遺糞症（排便の習慣がついていないため定期的に適当な量の排便が出来ない）場合があります。

園での場面から

10
発表会・運動会
(行事)

この子は何に困っているの？～理由の見立てからその子に合った支援を

練習が始まると、
情緒が不安定になるのはなぜ？

子どもが困っている原因を考え、仮説をたてる

* いつもと予定が違うのが不安なのかも？

● ほかに…

- * 大きな音や音楽が苦手なのかも？
- * 何が起きるか不安なのかも？
- * 自分が何をすればいいのか分からないのかも？

支援のポイント

どんな参加の仕方なら本人が安心できるのか考えます

環境設定の工夫のヒント

- 絵や文字の入った分かりやすいプログラムを作成して、進行状況が誰でも分かるようにします。
- 出番や役割が分かるようにプログラムに○印をつけます。

関わり方のヒント

- プログラムを見せながら指示します。
- 活動によっては先生と一緒に参加したり、子どもの組み合わせに配慮します。

家庭との連携のポイント

- 前年度の様子などビデオで見せてもらいましょう。
- 得意なこと、好きな物、苦手な物の情報を共有しましょう。
- 子どもの成長や良いところを共有認識します。
- 練習でがんばっている様子を伝えます。

ジャバラ式になっていると見やすい。
終わったものは切り離して。

専門家からのコメント

保育の専門家から

親の気持ちにも配慮を

発表会・運動会などでは結果を求めるのではなく、子どもたち一人ひとりにあった準備や練習で、仲間たちとの関係を築きながら参加できるように配慮します。そんな中で子どもたちはどんな子どもも受け入れ、楽しみながら参加する力が身につきます。まれに、子どもの特性を気にして行事の本番に休ませたいと考える親がいます。その気持ちにも配慮し、無理をしないようにしましょう。こんな時、子どもたちの成長を、その時という「点」ではなく「線」で捉えてもらえるようにしたいですね。子どもが半年前や一年前とどう変化したか見つめましょう。参加することによって、この「線」が見えてくると思います。

作業療法士から

出たがらない子

演目によっては、できないことを繰り返すことになってしまうことがあります。そのような場合には自分自身をその環境におきたくないと思うかもしれません。

言葉を聴いて理解する→行動をイメージする→脳が持っている身体イメージをもとに運動を組み立てる→実際に体を動かす→正しくできたのかどうかを感覚刺激を通して脳が確認する→目的的な運動の完成
これらの一連の流れの中でどこかつまづいてしまうところがあれば、発表会や運動会、体育、音楽の授業などは出たくないかもしれません。子どものこのような不安を理解し、できることから無理せずに進める配慮が必要です。

発表会・運動会

出し物や、競技は、子どもの気持ち、保護者の気持ちに配慮し、子ども一人ひとりの成長が感じられるように工夫を。感覚の過敏な子どもたちや、集団での行動が苦手な子どもたちへの配慮を。

発表会や運動会は、園の特色や実力を示す大切な機会です。いろいろな工夫と準備がされることでしょう。子どもたちも、家族やたくさんのお客様の前で緊張しながらも、見てもらうことにうれしさを感じる機会でもあります。

しかし、何より子どもたちの成長を見せることが目的で行われる行事であるはず。子どもの発達には、それぞれ大きな差や違いがあります。昨年できなかったことができた、来年はこれができるようにと、子ども一人ひとりの成長が感じられる出し物や、競技を工夫してみてください。特別なプログラムばかりではなく、日頃からの取り組みを発表したり、また子ども自身が選べるものがあるといいですね。また、感覚の過敏な子どもたちや、集団での行動が苦手な子どもたちへの配慮も十分にしてください。

A 保育園の運動会では

全年齢が「走る」をテーマに、それぞれ年齢ごとの競技が行われています。0歳児のハイハイのレースから、だんだん腕を振ってしっかり走れる5歳児まで、段階を追った、成長がわかりやすい競技を設定しています。次の年には、これができるようにと、本人やご家族が日常生活の目標とできますね。

また組体操を「1人じゃできないけど、5人あつまったらできることがあるよ」と説明するそうです。下の支え役の子どもたちも、部位や全体の写真をとってみせながら

練習することで、自分たちの役割が理解できたそうです。

B 幼稚園の発表会では

緊張するとパニックになるDくんのために事前に先生全員で、予測される行動への対策を考えました。あらかじめスケジュールを提示すること、落ち着けるような場所や、歌詞カード、待ち時間用に絵本などを準備しました。もちろん誰が使ってもいいものばかり。子どもたちみんなも活用でき、先生も落ち着いて進行できました。



親の思いは…②

行事は針のむしろ

今子どもは20歳を過ぎましたが、大きな行事の度に「嫌だなあ…」と思っていたことを思い出します。周りの子どもと同じようにできない、または参加できずに泣き叫ぶであろう息子の様子が思い浮かぶうえに、(決してそうではないのですが)好奇の目に曝される息子を見守る自信がなく…。できれば、休みたいと思っていました。行事は「針のむしろ」とはこういうことか、と体感する場面であつたりします。参加をすれば友だち、先生に応援されてがんばる我が子の姿を目にすることができ「良かった♪」と思えるのですが、その思いにたどり着くまでの親の心境というものは複雑なものなのです。

子どもにやさしい環境設定の例

朝の登園から、子どもたちは順をおって自分の荷物を片付け、自由遊びに入ります。(<… は子どもの動き)

そして、決まった時間が来ると朝の会が始まります。

この一連の動きを、子どもがいつ、どこで、何を、どうやってすればよいか理解し、また、子どもが自分でできるためには、分かりやすい動線の工夫が必要です。

◎数種類の時計を用意する

- ・アナログ
- ・デジタル
- ・タイムタイマー (時間の長さを表示)

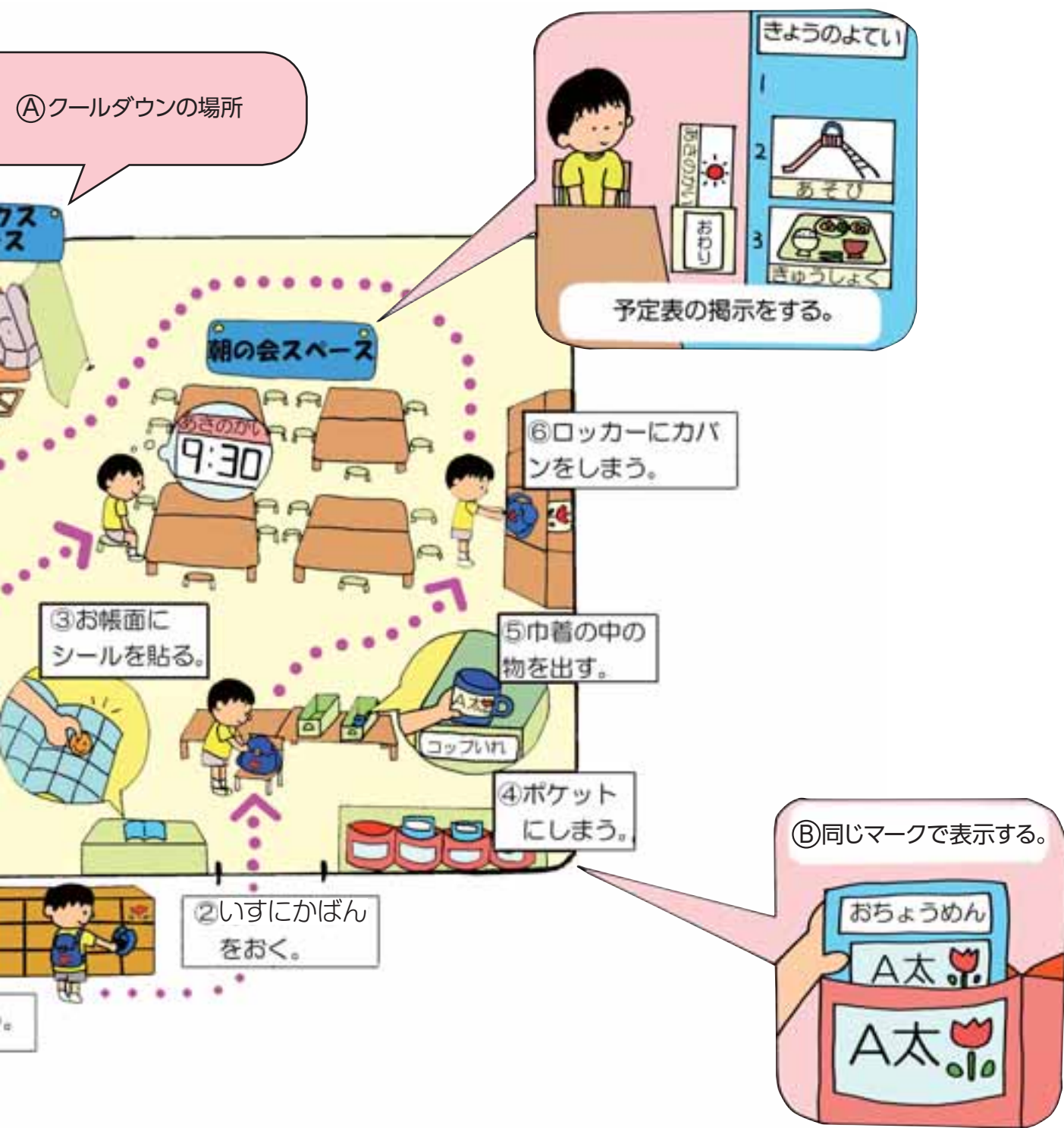
※タイムタイマー
残り時間の量を視覚的に示すもの



⑧朝の会の時間に気づく。

①靴をしまう

- ・子どもが主体的に活動できる動線を工夫しましょう。
- ・いつ、どこで、何を、どうやってするのかを明示します。



子どもの行動から

1

Q&A

あいさつをしない子

Q 1 ● 登園したときに目も合わさずあいさつもできない子がいます。正面から肩を抱きながら「おはよう！」とあいさつをしたら、私の手をふりほどいて、猛然とたたいてきました。何がいけなかったのでしょうか。

A 1 ● その子は、急に肩をつかまれたことや大きな声を出されたことに驚いたのかもしれない。

● 子どもの行動には理由や背景がある・・・

まず、その子のことを注意深く観察してみましょう。そして周りの同僚やその子のお母さんからもお話を聞いてみましょう。

触覚や聴覚などが過敏な子どもは、他人から体を触られることや大きな声や特定の声色が不快に感じることがあります。相手を攻撃することでその不快な状況から逃れようとする場合もあります。

● あるいは・・・

◆ 人との関わりが苦手なのかも？

普段からの周りの人や子どもたちとのコミュニケーション、問いかけの理解、また、目を見てお話しすることができていたでしょうか。その子は、人との関わりを持つことが苦手なのかもしれません。無理にほかの子と同じ反応を求めるのではなく、うなずきなどの仕草やカードの使用も認めて、その子なりの関わり方の幅を広げていけるようにしましょう。

◆ 見通しと異なる出来事に混乱したのかも？

先生が突然前に現れたので驚いたのかもしれないかもしれません。その子のなかで決まりごとや手順を強く決めてしている子がいます。そのような子は、見通しと異なる出来事が起こると混乱してしまうことがあります。

◆ 感情をコントロールできないのかも？

先生をたたいてしまったのは、その子に悪気があったわけではありません。ただ苦手なことに対してどのように対処してよいかを十分に理解していないのです。また、苦手なことや自分の見通しと異なることと直面したときに感情をコントロールすることに慣れていないのです。

● このような子どもには・・・

あいさつをすることは、人と関わるうえでとても大切なコミュニケーションの一つです。幼児期からあいさつをする習慣をつけていくことが必要です。ただし、その子の理解力やコミュニケーションの特性などを考慮せずにただくり返し教えていけば良いものでもなく、また放っておいて自然と身に付くものでもありません。その子の行動を注意深く観察し、行動の背景を考え、その子に合った関わり方を探ってみましょう。例えば現状では言葉でのあいさつが難しければ、まずは、先生とタッチすることや先生と握手をすることなどからスタートしても良いでしょう。段階的に、目を合わせたり、お辞儀をしたり、少しずつ関わりを増やしていくことで、ゆっくりであっても確実に発達していきます。

どうすればいいの？～特性の理解と正しい対応を

子どもの行動から

2

Q&A

遊びのルールを守れない子

Q 2 ● 集団遊びのルールが守れません。そのため、お友だちも誘わなくなっていました。どうすればいいでしょう？

A 2 ● その子はルールそのものを理解していないのかもしれませんが。

● 子どもの行動には理由や背景がある・・・

決まりごとは目に見える形で提示されていないことが多いものです。集団遊びのルールもその一つです。目に見えないルールを理解することが苦手なのかもしれません。

● あるいは・・・

◆状況を把握できないのかも？

例えば「鬼ごっこ」の場合、誰が鬼なのか、分からないのかもしれませんが。

順番を守れない場合は、どこに並べばいいのかが分からないのかもしれませんが。

◆記憶し続けることが苦手なのかも？

言葉は消えてしまいます。言葉だけでの説明だと、そのルールを覚えておくことができないかもしれません。

● このような子どもには・・・

遊びを始める前に、ルールをイラストなど視覚的に示しながら説明すると理解しやすくなります。また、これは他の子どもたちにも有効です。ルールが視覚的に示してあると、時間が経っても確認ができ、安心してゲームに参加できるようになります。

鬼ごっこの場合、鬼役が分かるように鬼役は帽子をかぶったり、紅白帽の色を変えたりすると誰が鬼か見て分かるので、その子も参加しやすいかもしれません。また、感覚が過敏だと人に触られることが非常に苦痛である子もいます。触られたただけなのに「たたかれた！」と感じてお友だちとトラブルになるケースもあります。そういう場合は、しっぽ鬼にするなど、不快に思わずに参加できるルールにするのも一つの方法です。

どうすれば、その子が楽しく参加できるかな？ という視点をもって、創意工夫をすることが大事です。

また、並ぶことや順番を覚えることも大事です。並ぶ場所が本人に分かるように待つ場所を作る、次の順番の人は目印のぬいぐるみを持つなど目で見て分かる工夫をしましょう。

時間やルールなどは目に見えません。その子が理解できるように伝えることが大事です。そして、ルールを守ることができたらほめてあげましょう。



子どもの行動から

3

Q&A

ウロウロする子

Q 3 ● ● **すぐに保育室を出て行って園舎内をウロウロしています。どうしたらいいでしょう？**

A 3 ● ● **集団が苦手で、その場に居ることができなくなって、出て行ったのかもしれませんが。**

● **子どもの行動には理由や背景がある・・・**

感覚が過敏な子どもだと保育室の中のざわざわした音や雰囲気は苦手である場合もあります。

● **あるいは・・・**

他に考えられる理由として・・・

- ◆気になるものが目に入り、衝動的に保育室を出て行ったのかも？
- ◆バランスをとったり体を動かしたりしたときに感じる刺激を感じにくいため刺激を求めて動くのかも？
- ◆刺激となる音（友だち同士のけんかする声など）が耐えられなくなったのかも？
- ◆保育室の中で「どこに座ればいいのか」「何をすればいいのか」が分からないのかも？
- ◆園での決まりごとが理解できず、出て行ってしまったのかも？

このように、外に出ていく原因をその子の様子を良く見て想定してみることから始めましょう。

● **このような子どもには・・・**

子どもがどんなときにウロウロするのか、反対にウロウロしないで教室で過ごせるのはどんな活動か、どんな声かけをすると戻って来られるかなども記録しておく、子どもの行動パターンや関わり方のコツが見えてきます。話ができる子であれば、「なにか気になることがあったの？」「なにか嫌なことがあったかな？」など、理由を本人に聞いてみるのも良いと思います。

原因が感覚の問題であれば、できるだけその刺激を避ける工夫が必要です。音であればイヤーマフ（*図）の活用を試みるのも良いでしょう。外のものが気になり飛び出すようであればカーテンを閉め、目に入らないようにします。座る場所を考慮し、離席をしたら素早く声をかけ、衝動を抑える工夫もしてみましょう。

また、保育室の一角にその子が落ち着ける場所を作っておくだけで、外に出ることが減ることもあります。

また、外に向かって行く子どもに「ダメ」「やめようね」など、してはいけないことだけを伝えるのではなく、例えば「座って〇〇をしてね」など、子どもにしてほしいことも同時に伝えましょう。

集団生活のマナーやルールは目に見えないために分かりにくいことがあります。その子が自分で何をすれば良いのか分かるように視覚的に示してあげることが大切です。

（P7の「専門家からのコメント」（作業療法士から）も参照してください）



たたいたり、けったりする子

Q 4 ● ● **すぐにカッとして周りの友だちをたたいたり、けったりします。どうすればいいのでしょうか？**

A 4 ● ● **まず、その場から離して、本人が落ち着ける場所に連れて行き興奮をしずめるようにしましょう。**

● **子どもの行動には理由や背景がある・・・**

その子は、友だちに注意や非難をされた時に、どうふるまえばいいのかわからないのかもしれません。

● **あるいは・・・**

◆ **感情のコントロールができないのかも？**

衝動性が高く、自分で感情をコントロールできずに手が出ているのかもしれません。

他人から触られるのが苦痛な子がいます。

● **このような子どもには・・・**

人をたたく以外の意思表示の方法を具体的に教えてあげましょう。その際には、まず、その子の気持ちに寄り添い、何が嫌だったのか、何をしたかったのかを事の経緯から探ります。それを踏まえて、どうすればいいのかをその子に分かるやり方で少しずつ教えていきましょう。

人をたたく以外の意思表示の方法、例えば『やめて』『○○しないで』と言おうね』と子どもに気持ちの伝え方を教えます。うまくできたときはほめてあげましょう。また、まわりの人に助けを求めすることも教えましょう。

それから、「いつ」「どこで」「誰と」「何をしたのか」、トラブルが起きた状況の記録を取ってみるとトラブルが起きやすい状況や、そのときの子どもの気持ちが見えてくるでしょう。

日頃から様子をよく見てトラブルが起きないように保育者が間に入って事前にトラブルを避けるように心がけましょう。また、保育者は周囲の子どもたちに対して、その子への関わり方の手本となるようにしましょう。

感情のコントロールはとても難しいことです。「10、数えようね。」「深呼吸してみよう。」「時計の針が○になるまで待ってみよう。」など具体的に教えることがポイントです。

● **保護者に対して**

たたいた子、たたかれた子の保護者には、双方に問題が起きた時の状況をていねいに伝えると共に、園側の対応も説明しましょう。その際、担任の先生だけの責任とせず、園全体の責任として対応しましょう。

たたいた子の保護者は、トラブルが続くと肩身の狭い思いを抱き、また、周囲から孤立しがちになります。保護者には、園側として起きた問題だけを伝えるのではなく、トラブルが起きた原因や、それを避けるための今後の具体的な対応などを伝えましょう。適切な支援のための話し合いや協力し合うことの重要性も話していきましょう。

順番にこだわる子

Q 6 ● とにかく1番じゃないと気がすまないようで、1番になれないと怒ったり、泣いたりします。どうすればいいのでしょうか？

A 6 ● 1番の「順位」にこだわっている場合は「必ずしも1番が良いということではない」ということをていねいに説明しましょう。

● 子どもの行動には理由や背景がある・・・

「思い通りにしたい」という気持ちが強いのは、「わがまま」ではなく、その子にとって大きな不安や恐怖感の表れなのかもしれません。

「こだわり」は不安の表れです。ですので、何もかも否定をしてしまうと余計に不安になってしまうこともあります。何が不安なのか、その原因を探り、できるだけ取り除いてください。

● あるいは・・・

◆ 1番の「場所」にこだわっているのかも？

「ここじゃなきゃ！」とその子が思っている場所に、本人の名前やマークを付けることでまずはこだわる場所を認めてあげるようにすると、お友だちとのトラブルは減るでしょう。

● このような子どもには・・・

1番の「順位」にこだわる子どもの場合は、日常的に保育者が「1番にできたの？すごいね！」などとうつつい1番にできることを評価する場面が多いのかもしれません。そのため、その子はほめられたくて1番にこだわっているのかもしれません。

そういう場合は、「ていねいにできたのね、えらい！」などと順位に関係の無い場面でほめることを増やすなどの対応が望まれます。

1番じゃなくてもほめられるんだ、ということ学ぶことが大事です。

1番の「場所」にこだわる子には、最初のうちは場所にこだわっていることを認めてやり、その後少しずつ予告しながら週替わりなどで場所を移動してみたりすることでもしてみましょう。

集団生活の中では自分の思い通りにならないこともたくさんあります。自分の思い通りになる経験ばかりが積み重なってしまうと、周囲からわがままな子と見られてしまったり拒否されてしまったりすることもあります。がまんする力は幼い時期から少しずつ育てていくことが大切です。そのために子どものこだわりの内容によっては大人が譲らない姿勢を示すことも必要になります。

子どもが自分の思いを通そうと激しいかんしゃくを起こしたときは、落ち着ける場所に移して、気持ちが切り替わるのを見守ってあげましょう。落ち着いた後には、短く穏やかに、「がまんできたね」「気持ち切り替わるのが早くなったね」などとほめてあげると、少しずつがまんする力がついていきます。

ただし、何事もがまんさせるということは子どもの成長にとって逆効果になってしまうこともあります。情緒面で非常に不安定になってしまい激しいかんしゃくばかり起こしてしまうこともあります。こだわりの内容が集団生活の妨げにならないものであれば、許容してあげることも必要な場合があります。

子どもの行動から

7

Q&A

おとなしすぎる子

Q 7 ● いつもおとなしく、友だちに言われるままに動いている子がいます。そのままで大丈夫でしょうか？

A 7 ● その場では、保育者はその子の気持ちを聞いて代弁してあげる必要があります。

● 子どもの行動には理由や背景がある・・・

このような子どもは、言われたことは「やらなければならない」と自分で自分にプレッシャーをかけてしまう特性があります。とても真面目で手を抜くことができず、実はとても無理をしていたり、嫌なことを嫌だと言えない子どもだと思われまますので、特に配慮が必要です。

● あるいは・・・

◆コミュニケーションの取り方がわからないのかも？

就学前は、子どもは友達関係の築き方が良く分かっておらず、社会性を学んでいる最中と言えます。子どもたちの中には、もともとコミュニケーションを取る力が弱い特性を持っている子もいます。そのような子は、言葉通りに取ってしまったり、本気と冗談の区別がつかなかったり、言い返したり、「いや」と言えない子もいるのです。

● このような子どもには・・・

「手がかからない」と放っておかず、無理をしていないか注意深く様子を見てください。相手に対して、否定的な言葉を使いたくない気持ちが強い場合が多いので、例えば食事の際、「いやです。」「嫌いです。」という言葉ではなく「減らしてください。」という別の言葉を教えましょう。

また、意識的に、遊びの場などで「どっちで遊ぶ？」など尋ねて、選択できる場面を作り、自分の意思を伝えることを経験させることも大切です。

言葉で意思を伝えることが難しい子どもには、絵カードを選択したり、指さしやジェスチャーで示したりその子ができることで「意思を伝える」ことを認めてあげましょう。どのような方法であってもまずは意思を伝える経験をたくさん積んでいくことが大切です。

小さい時から周囲の大人がその子の気持ちに寄り添い、また、様子にも気を配り、少しずつでも自分の意思を出せるように働きかけていきましょう。

その子が気持ちを伝えることができたならうんとほめてあげましょう。



どうすればいいの？～特性の理解と正しい対応を

子どもの行動から

8

Q&A

通園バスの座席に こだわる子

Q 8 ● 通園バスの中で、座る位置にこだわり、友だちに手を出したりするのですが、どうすればいいのでしょうか？

A 8 ● 「座る場所にこだわる」のは何か不安があるからです。その不安の原因を確認しましょう。

● 子どもの行動には理由や背景がある・・・

「こだわり」は、その場面が不安であるために「いつもと同じように」あってほしいという思いの表れです。その子なりの心のバランスを取るひとつの方法であったりします。

「ここはいつもの場所だね」と確認するために儀式的に場所を確認する子もいます。その時に、「いつもと違う光景」はその子にとっては「知らない場所に連れて来られた」と同じくらい不安と混乱を招くのです。

まずは、本人にとって何が不安であるのか、様子を観察すると共に、家庭と情報共有を図ることで、その原因を探りましょう。安心できるようにするにはどうすればいいのか、その子の思いに寄り添って考えてみましょう。

● このような子どもには・・・

「座る場所」については、自分の思い通りにいつも座れるわけではないということと席が替わっても大丈夫だということを学ぶ必要があります。そのためには、通園バスの座席に園児の名前シール等で座る場所を示し、月ごとに席替えをしていく取り組みも有効です。ただし、いきなり変更するのではなく、バスに乗る前に、「今日の座席はここだよ」と視覚的に本人に分かる方法で伝えることも大事です。

席が替わっても何ら問題ないと本人が思えるようになるには時間がかかるかもしれませんが、その不安は計り知れないものがあるということを考慮しながら、スモールステップで取り組みましょう。

また、バスの中でのルールも学ぶ必要があります。ルールは目で見て確認できないものです。視覚的に提示するようにしましょう。

お友だちに手を出すことについては、本人にとっては安心の場面をじゃまされた！と認めてのことかもしれません。とはいえ、手を出すことは良くないことです。たたいたりすること以外での、正しい関わり方を保育者が手本を見せながら教えてあげましょう。

通園バスの利用の仕方は、公共のバスや電車の乗り方の学習にもつながります。社会のルール、マナーを学ぶことを意識して、ていねいに教えましょう。



子どもの行動から

9

Q&A

他人の物を持ってきてしまう子

Q 9 ● 他人の物や園にある物を何でも持ってきてしまう子どもにはどうすればいいのでしょうか？

A 9 ● 自分の物と他人の物の区別をつけさせるとともに、他人の物を持ってきてはいけないということをていねいに教えます。

● 子どもの行動には理由や背景がある・・・

まず、どんな時にどんな物を持ってきてしまうのか、その子どもの行動を注意深く観察してみましょう。また、保護者からも家庭や外出時の様子についても情報を得るようにしましょう。社会の基本的なルールは、小さなときから一つひとつていねいに教えていかななくてはなりません。中には周りの子どもたちよりもっとていねいに教えないと身に付かない子もいるのです。

● あるいは・・・

◆衝動性が高くてつい持ってきたのかも？

他人の物を盗^とってはいけないというルールは分かっているけど、目の前の自分のほしい物、関心のある物を見て、後先考えずにポケットに入れてしまったのかもしれない。

周囲の状況を押し量り、状況にあった行動を取るのが苦手な子がいます。

次の日も園にやってくれば、気に入った物で遊べるということが分からないのかもしれない。

● このような子どもには・・・

一方的に注意するのではなく、本人に「してはいけないこと」、「しなければならないこと」を気付かせることが重要です。そして、相手にあやまることをていねいに教えます。その際には、絵カードなどで視覚的に分かるよう教えましょう。

その子の持ち物が分かるように同じマークのシールを貼っておいて、自分の物とそれ以外の物を分かりやすくすることが大切です。

また、帰るときの持ち物は自分のマークの付いている物だけという事を習慣化することが大切です。自分の持ち物を目で見て本人が確認できるように工夫しましょう。

帰宅後、片付けをする際に、親子で通園バックの中身を一緒に片付けながら確認してもらうようお願いして、園と家庭で連携しながら根気よく取り組みましょう。



パニックを起こす子

Q 10 ● パニックを起こされるとびっくりしてしまいます。どう対応すればいいのでしょうか？

A 10 ● まず、落ち着ける場所に移動させ、気持ちを落ち着かせることが大事です。声をかけたり、無理やり押さえこんだりするのは逆効果です。

● 子どもの行動には理由や背景がある・・・

まず、落ち着いて注意深く観察してみましょう。重要なのは、どうしてパニックになったのかその原因を見つけ出すことです。原因の無いパニックはありません。パニックの中には、その場で「自分が何をすればいいのか」「これから何が起きるのか」分からず、不安になって起こすものがあります。これらはその子の不安が解消できるような配慮があれば起こさずにすむものです。

また、子どもによっては「泣き叫ぶ」「奇声を上げる」「自傷（自分の身体を傷つける）」「他害（周囲の人に飛びかかる、殴りかかる等）」とさまざまな行動を示すことがあります。この時、一番つらいのは本人であるということを理解しましょう。

● あるいは・・・

◆ その子なりの見通しが崩れてしまったのかも？

急な予定の変更などがあると想像力や周りの認識力が乏しい子は、不安感に包まれてしまいます。

◆ 昔のつらいことを思い出したのかも？

以前体験した場面が忘れられない特性をもつ子がいます。何かの拍子にその情景が鮮明に思い出され、つらくなったのかもかもしれません。

◆ 嫌いな音、臭いなどの刺激がいやだったのかも？

感覚の過敏さは本人じゃないと分からないつらさです。その点は配慮してあげましょう。

◆ 集中していたところを急に邪魔されたのかも？

突然の変化に弱い場合があります。

● このような子どもには・・・

予定の変更があった時には、事前にその子に分かるように伝えてください。

その際、言葉だけでなく視覚的な手がかりも使うと目で見て確認ができるので安心します。

パニックを起こすのには必ず理由があります。不安を解消するために、その子が混乱せずにすむには…と、配慮をしていればパニックを起こさずにすむ場合が多いです。時には、どうすればいいのかわらう口所在無げに歩き回ったり、顔つきが変わってきたり、前兆が見て取れることがあります。その変化を見落とさないことも大事です。

パニックを起こさずにすむように配慮することが第一です。もし起きてしまった時は気分転換、場面転換を図り、短い時間で気持ちが切り替えられるよう配慮しましょう。

苦手なもの、嫌いなものを把握しておくのもパニックを起こさないですむことにつながります。家庭と情報を共有しましょう。



カーテンで仕切るなど、その子の落ち着く環境を用意します。

専門家からのアドバイス

医師の立場から

発達に障害を起こす疾患や病態について

—二次障害を防ぐ重要性の認識を—

このみ
許斐 博史 (医師、中川の郷療育センター施設長)

情緒的発達に障害を起こす代表的な疾患は、広汎性発達障害（自閉症）、注意欠陥多動性障害（AD/HD）、学習障害（LD）、知的障害などです。いずれの疾患も脳の器質性病変によって引き起こされるものです。お母さんや先生の子育てや療育活動は、子どもの情緒的・知的発達に大きな影響を及ぼしますが、発達障害児に認められるコミュニケーション障害、環境適応の困難さ、多動性・衝動性・不注意、指示の入りにくさ、知的能力のアンバランス、知的能力の障害などは、生まれた時より存在するものです。多くの発達障害児は情緒的・知的な障害と同時に、脳障害を反映した種々の程度の発達性協調運動障害が認められます。発達障害児の療育においては、情緒的・知的障害を改善する訓練とともに、身体的な巧緻動作の向上や感覚統合療法などの訓練が必要です。

発達障害児の特性が理解されないままに幼稚園、小・中学校を過ごすことによって、図1で表わしているように、子どもたちは自信を喪失し、親・先生や友だちに対する不信感を募らせ、また一方“やりたいようにやりたい”との想いで自己コントロールが困難な状況になりがちです。その結果、場になじめなかったり、暴力行為を引き起こしたりします。そして、最も深刻なことは、上記したような状況が長期間継続することによって引き起こされる二次的適応障害です。2～5歳児の訴え・問題点は、言葉の遅れ（発達の遅れ）、落ち着きがない、こだわりが強い、集団生活についていけないなどですが、小学校低学年は、授業中着席できない、騒ぐ、友人がいない、暴力行為（ぶつ、投げる）、いじめ、学力不足、場面かん黙など、小学校高学年～中学校・高校になりますと、不登校、引きこもり、いじめ、家庭内暴力、孤立・孤独など、年齢が上がるにつれて対処困難な状況が生まれてきます。そのために子どもの療育は集団生活を始める3～4歳頃よりスタートする必要があると考えます。

図1. 発達障害児の現状
(何も手を打たない場合)

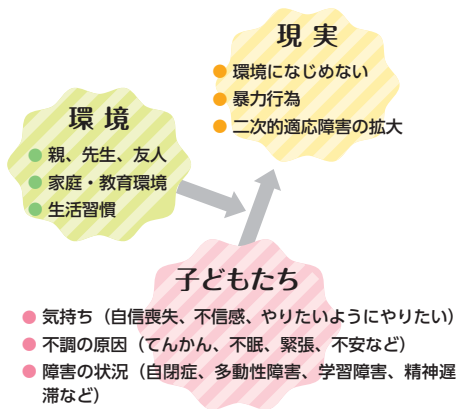
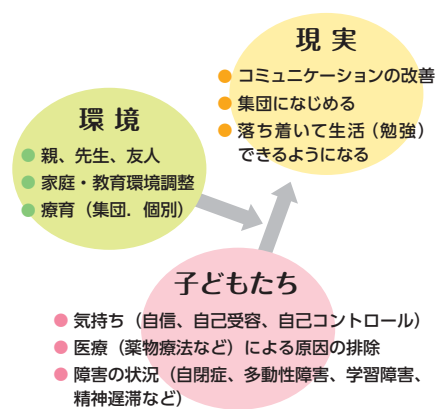


図2. 発達障害児の療育目標



発達障害児の療育の目標は、図2で表しているように、家庭や教育環境を整え、個別および集団療育を行うことによって、子どもたちが自信を取り戻し、自己受容や自己コントロールが可能となり、場になじめず二次障害が拡大する状況より、コミュニケーションが改善し、集団になじめるようになり、落ち着いて生活（勉強）できるようになることであると考えます。

発達障害の療育のポイント

鈴木 郁子 (医師、毛呂病院光の家療育センター施設長)

発達障害の子どももそうでない子どもも基本的に身に付けて欲しい事は、人を信用するという事です。人間は一生、人との関係の中で生きていきます。人との関係が穏やかに結べる事が一番の基本かもしれません。

子どもが会う最初の間が母親です。母子関係がうまくいかない原因は、子どもの側にある場合と親の側にある場合があります。また、この関係が悪いと子どもと母親の距離がどんどん遠のくことがあります。子どもと母親は、一体で、母親にゆとりがなければ、子どもと良い人間関係は結べません。幼稚園、保育園の先生方にはぜひ、家族支援という視点を持っていただきたいです。

また、幼児期は、脳の重量が劇的に増える時期です。つまり、この時期の経験が大人になっても影響する大事な時期です。幼稚園、保育園の先生は責任重大です。信頼関係は、否定的感情からは生まれません。相手の立場に立って、相手の困った気持ちに寄り添うことが、スタートで基本だと考えます。

子どもが伸びていくために、子どもがやる気になるように設定していくことが腕の見せ所です。このためには、子どもの力と、心の両方が読み取れなくてはなりません。そして、その都度、その都度ゴール設定を変えて、スモールステップで、最後、自分がやれたと思う達成感が、その子が、学習し、行動が変容することにつながります。

また、子どもや親のために何かできることが見つかった時には、人手がないとか資源がないと言わずに、決してあきらめないで、何かしら手だてを探してあげてください。

発達障害の療育のポイントは、①本人を中心に置くこと。困っているのは先生たちでなく、子どもという事に気が付くこと、②子どもの視点に立った時、どういう情報の提示が本人に分かりやすいか考えてあげること、③ゆとりの中での子育てができるように家族支援をしてあげること、④先生一人が悪戦苦闘したり抱え込んだりしないで、園内資源や園外資源（福祉サービス、医療機関、療育機関）を活用する発想を持つこと、⑤子どもは、達成感の中で伸びていくのだから、スモールステップをいかに設定していくかという視点を持つこと、⑥子どもの心に人への信頼感と自己肯定感の土台を築くこと。

最終的には、障害のある子が住みやすい地域をつくること、イコール障害児を蔑視しない価値観の共有です。同じでなければ排除するという考え方でなく、異質な物も認め合う（同化 排除でなく、異質 共同）精神が大事かと考えます。

臨床心理士の立場から

子どもの行動の理由を考えよう

原口 英之（臨床心理士、前所沢市立教育センター教育相談員、筑波大学大学院）

近年、保育現場で“気になる”子どもに関するさまざまな書籍が出版され、子どもたちの支援に関する情報があふれています。このようにして、子どもたちの発達を応援していこうという認識が社会全体に広まってきたことは望ましいことである一方、子どもたちに対する支援方法に一つの正解があるような印象も受けます。本来、子どもたち一人一人は違い、一人一人がその子なりの良さを持っています。正解は決して一つではありません。“気になる”子どもだから支援をする、“気になる”からこういう支援をする、のではなく、子どもはどんな子どもも支援を必要としているのです。一人一人の違いがあることは、その支援の程度や量が多いか少ないかの違いだけなのだと思います。

さまざまな専門書や書籍の中では、「こういう子どもに対してはこうしましょう」というような対応方法が中心に書かれています。子どもたち一人一人に合った支援をじっくり考える余裕がない状況の中では、支援のアイデアは大変便利で、実際有効な場合も多いことでしょう。しかしそれでもうまくいかない場合があります。そのような場合にはどうすれば良いか分からなくなってしまうことがあります。どうしてうまくいかなかったのでしょうか。子どもが見せる姿の背景や理由が異なるからかもしれません。大切なことは、対応方法を考える前に、なぜそういう行動をするのだろうか、なぜ行動しないのだろうか、など理由を考えてみることです。この冊子には、子どもたちの行動の理由について考えるためのヒントがたくさん盛り込まれています。もちろん支援の工夫も紹介しています。ただしあくまで一例です。子どもたち一人一人は違い、その違いを越えて一人一人にオーダーメイドの支援ができるのは、毎日子どもたちと関わっている先生方です。この冊子どおりの支援を目指すのではなく、関わっている子どもたちの支援の工夫を考え出すヒントとして冊子を活用していただくとうれしく思います。

子どもの行動の理由を探るときには、子どもの立場に立って、子どもの目線になって考えてみるのが大切です。ときどき、実際に子どもが普段座っている席に座ってみたり、そこから先生の立ち位置や友だちの席、クラス環境全体を見てみたり、子どもが行動しているようにクラスの中を動いてみると、大人の目線からだと見えていなかったことが見えてくるのではないのでしょうか。

言語聴覚士の立場から

ことばの発達にも段階がある

あがりえ

東江 浩美（言語聴覚士、国立障害者リハビリテーションセンター）

1 ことばの理解が大切です。

「ことば」というと、多くの人が「話しことば」を思い浮かべます。「ことばが遅い」「発音が不明瞭」「会話が続かない」という訴えも、主に話しことばについての心配ごとです。コミュニケーションは伝え合い。相手の発したことばの意味を理解することはとても大切なことであり、またことばを話すことの基礎となることが分かっています。

2 目の前の出来事について話すことから始めましょう。

3歳、4歳になると、質問に答えたり、文章で話したり、会話ができるようになってきます。会話の発達にも段階があります。たとえば、過去や未来の出来事について話す段階より先に、目の前のこと（現前事象）を話題にして話せる段階があります。従って先週に園で行った遠足について話し合うときには、写真を一緒に見ながら話し合った方が、遠足の場面を目の前に再現することになりますから、ことばのみで話し合うより容易です。何を話題にしているかが明確なので、話題からそれずに話すこともできます。絵を書いてやりながら話したり、関連するもの（入場券など）を見せながら話すのもよい工夫です。

3 文字学習について

音声言語は話した途端に消えていくという特徴があります。その点、文字は消えずに残っていて何度も確認することができます。ことばの音は物理的には切れ目のない空気の波。しかし文字は1文字ずつあるいは文節ごとに区切ることができるため、言語の構造を明確に示すことができるという利点もあります。音声言語の獲得が不得手な子どもの中には、文字言語の学習の方が容易だったり、文字が添えられていることで音声言語の学習がすすむ子どももいます。ロッカーに貼ってある子どもの名前、クラス名、看板などを『『みどり』って書いてあるね』などと指さして読んでやることは、文字に興味を持つきっかけになります。その際、1文字ずつ読むことや書くことを優先するのではなく、意味のある単語として読むことを先に教えるのが効果的です。

4 発音について

ことばの発達途上では、発音は未熟なのが通常です。しかし、何でも話せるようになって「あちたえんとくにパチュでいってチェンチェーがいった」（明日遠足にバスで行って先生が言った）のように、発音が未熟なまま変化のない子どもも見受けられます。そのような場合は近隣の言語聴覚士に相談してください。力行の誤りは4歳半～5歳、サ行の誤りは5歳～6歳を目安にすると良いでしょう。

作業療法士の立場から

対症療法的な関わりでは、子どもたちの生きにくさの解決にならない

石井 孝弘（作業療法士、帝京科学大学医療科学部作業療法学科教授）

今、目の前にいる子どもたちが少しでも生きやすくなるために社会に働きかけることが私の仕事と思っています。この冊子の中でも繰り返し話されていますが、子どもたちの行動には必ずその理由があります。周囲に人たちが「なぜそのような行動をするのだろうか？」と思うことから子どもの理解がスタートします。今、目の前に見ることができる行動のみを変容しようとして行う対症療法的なかわりは、子どもにとっても周囲の人たちにとっても本質的な問題の解決にはなりません。

たとえば耳をふさぐ子どもには必ず耳をふさぐ理由があります。その子どもにとって耳をふさがなければならぬ不快な音が聞こえているかもしれません。でするのでその手を無理に耳からはずそうとすることは、その子どもにとってはとても辛いことになるでしょう。つまり、今、目の前にいる子どもにとって周囲の音がどのように影響しているのかという視点が重要です。多くの人が不快な音ではないとしてもその子どもにとっては不快な音であるという理解です。たとえば黒板やすりガラスにつめを立てて引きずったときの「キー——」という音が耳元で聞こえてきたら多く人は耳をふさぐことでしょう。そのときに「大丈夫でしょう！」「耳から手を離して」と言われても不快なものは不快なんです。耳から手は離せないでしょう。もしくはそこから離れていくことでしょう。であるならば、子どもたちが耳をふさいでいるときには、「もしかしらたらとても不快な音が聞こえているの

かもしれない。別の場所に移ろう」と理解して行動をとれば子どもはとても楽になるかもしれません。このときに「大丈夫だよ」「落ち着いてね」「ちょっとがまんしようね」「耳から手を離そうね、偉いねー」このような言葉かけは、まったく意味を持たないことがすでに理解できると思います。

今まではこのような対症療法的なかかわりが多く、子どもたちの生きにくさの解決にはなっていないことがほとんどです。

いすから立ち上がり教室にいられない子どもも必ずその理由があります。その理由を考えずして、席に戻して「授業中だから座ってようね」「がんばろうね」と言われてもその子どもの支援にはなりません。また先生が厳しければ子どもはがまんして座っているしかないかも知れません。その現象だけを見て「席から離れなくなった」と判断することは間違っているといわざるを得ません。お子さんはますます苦しくなるばかりです。

子どもたちがとる行動には必ず理由がある。その理由を確実に把握して対応する支援する方法を取ることに周囲の人たちが最大限の努力をすることが今、求められていると思います。

保育の専門家の立場から

達成感を育てよう

高橋 雅江（保育士、新宿こだま保育園副園長）

幼稚園、保育園の中で、気になる子どもたちはどのクラスにもいます。しかし、保育の中で一番大切にしたいことは、子どもたちの自信を失わせないことです。子どもの発達を見極め、遅れや偏り、歪みがあるのなら、その子に合った小さい目標から掲げ、子ども自身が、楽しい中で「できた」と、何度も経験できることです。そして、保育者や子どもと関わって楽しいと思える経験もさせたいです。

なぜ、その行動が起きているのか？ 環境の見直しが必要かもしれません。発達にあった遊びの内容かどうか、子どもに分かりやすい伝え方かどうか。ほめる技術も必要かもしれません。

私たちは、発達、保育のプロとして、子どもたちの自信を失わせないように、職員全体で取り組んでいきましょう。担任一人が抱え込まず、職員のチーム力で子どもたちのために解決していくことが重要です。

発達障害支援に関する保育所・幼稚園向け冊子作成会議メンバー（五十音順・敬称略）

- 東江 浩美（言語聴覚士、国立障害者リハビリテーションセンター）
- 石井 孝弘（作業療法士、帝京科学大学医療科学部作業療法学科教授）
- 小村由美子（埼玉県自閉症協会会長、日本発達障害ネットワーク埼玉代表）
- 許斐 博史（医師、中川の郷療育センター施設長）
- 小山 一宏（全埼玉私立幼稚園連合会、与野愛仕幼稚園園長）
- 鈴木 郁子（医師、毛呂病院光の家療育センター施設長）
- 高橋 雅江（保育士、新宿こだま保育園副園長）
- 原口 英之（臨床心理士、前所沢市立教育センター教育相談員、筑波大学大学院）
- 吉田 武人（埼玉県保育協議会会長、寺谷保育園園長）
- 渡部 庄一（埼玉県特別支援教育課発達支援専門員、前本庄特別支援学校校長）

サポート手帳について

親が中核となり、子どもに関する医療、療育、保健、福祉、教育等の支援情報を共有し、一貫した支援に活用します

埼玉県では、乳幼児期から成人期に至るまで一貫した支援のために「サポート手帳」を作成しました。主に発達障害があったり、発達が気になりだったりする子どもをお持ちの保護者のうち、希望者に配布しています。医療、保健、福祉、教育、就労等の関係機関において、支援内容等の情報が共有され、一貫した支援を受けられる体制を構築することを目的としています。保護者や本人が、プロフィールや関係機関からの支援状況等を「サポート手帳」に記録し、必要に応じて、関係機関に提示することによって、相互に共通認識を深めることができます。

支援者がサポート手帳に記入するのは、実際に行った支援の内容を申し送る必要がある場合です。日々の支援の内容を書き込むものではありません。保育所・幼稚園で記入してもらいたいことは、主に、①支援計画（立案時に記入）と②小学校・小学部への引き継ぎ事項（就学相談時まで作成・記入し、保護者に説明）の2点です。特に、小学校・小学部への引き継ぎ事項として、在園中にその子ができるようになったこと、苦手なこと、配慮が必要なことなどを書いてください。

サポート手帳の入手方法

お住まいの各市町村（さいたま市は除く）で配布しています。詳しくは、市町村の障害福祉担当窓口にお問い合わせください。必要な書式の追加や、電子データからの直接入力をする場合は、埼玉県福祉部福祉政策課のホームページからダウンロードできます。<http://www.pref.saitama.lg.jp/site/hattatu/#lifestage>

医療機関・療育機関へのつなぎ方

発達障害を早期に見つけ、早期に支援を受けて育ったお子さんは予後が良好のようです。また、診断を受けることが親にとって自分の子どもをしっかり見つめ直す機会にもなるでしょう。状況によって医療機関や療育機関、園への巡回療育相談や、保健センターでの発

育発達相談などがあることを伝えてあげてください。円滑に機関へつなげるには、園から保護者に子どものマイナス面ばかり伝えるのではなく、子どものことを心配しているような姿勢を示すことが必要です。そのために普段からのコミュニケーションを大切にしましょう。

あとがきにかえて 自信や自己肯定感を育む保育を

発達障害、特に高機能自閉症、注意欠陥多動性障害（AD/HD）、学習障害（LD）等の発達障害のある子どもたちは、その障害の実相が第三者に極めて見えにくく理解されにくいだけでなく、誤解されやすい面があります。問題となる行動の指摘が優先し、障害への気付きやその特性に応じた適切な対応が遅れがちになります。発達障害のある子どもの保育や教育に当たっては、こうした理解されにくく誤解されやすい障害の特性をまず押さえ、その子どもの現実、ありのままを受け入れていねいに観察し状態像の理解に迫ることが指導の第一歩です。

「失われたものを数えるな、残されたものを数えよ。」は障害者スポーツにおいて有名な言葉ですが、障害のある子どもの指導において、最も心したい言葉の一つであると思います。発達障害のある子どもたちは、自己肯定感、自己有用感を持ちにくく、自己否定感が強くなりやすい面があると言われる。問題となる行動ばかりを指摘、取り上げるのではなく、その子の優れた面、得意なこと、努力していること等、長所を認め評価し本人の持てる力を引き出し引き上げてあげることが極めて重要であり効果的です。

また、教育の適時性という観点から考え、就学前の早期の段階での障害の気付きと特性に合った適切な対応の意義、重要性を改めて認識することが大切であると思います。そのためには、保育園、幼稚園の先生方はじめ関係者の早期の「気付き」が大切です。「もしかしたら、発達障害があるかもしれない」という仮説を持つことに躊躇しないで、早期からの理解と支援、保護者支援、母親支援につなげていくことだと思います。本県では、障害のある子どもの生涯にわたる支援のツールとして、「サポート手帳」の普及、活用を進めています。ぜひ、その子の実態把握、具体的支援の内容や方法、相談の履歴などを教育機関はじめとする支援機関につなげ、指導支援に必要な情報の共有、支援体制の充実を関係者で協力して推進していくことが最も必要なことであると思います。

渡部 庄一（埼玉県特別支援教育課発達支援専門員・前本庄特別支援学校校長）

「保育士・幼稚園教諭向け 実践に活かす 気になる子への支援ガイドブック」

企画・発行：埼玉県 平成 23 年 10 月発行

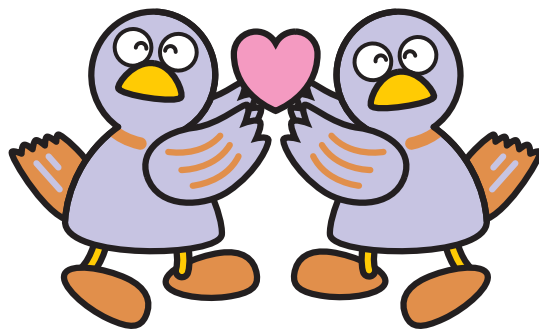
構成：オフィス淡海 編集：大岡千恵子（オフィス淡海） イラスト：桂山加奈子

関係機関一覧

身近な地域の相談機関			
相談の内容	機関 / 運営者 主体分類	窓口名 / 事業所等名	連絡先 / 掲載先
児童の福祉サービスについての相談	市町村	児童福祉担当	※お住まいの市町村の連絡先を記入してください
乳幼児の健康相談、子どもの発達やことばについての相談	市町村	保健センター	
障害児・者の福祉サービスについての相談	市町村	障害福祉担当課	
就学時の教育相談	市町村	教育委員会	
子育てについての相談（0 - 3歳児）	市町村等	地域子育て支援拠点	※お住まいの地域を担当する事業所等の連絡先を記入してください
地域の障害児・者の福祉サービスについての相談	民間等	障害者相談支援事業所	
訪問や外来による療育指導や障害児等についての相談	民間等	障害児等療育支援事業実施施設	

広域の関係機関			
相談の内容	機関 / 運営者 主体分類	窓口名 / 事業所等名	連絡先 / 掲載先
子どもの心の問題についての健康相談	県	保健所（管轄区域は、HP参照） （さいたま市、川越市にお住まいの方は市の保健所へ）	http://www.pref.saitama.lg.jp/site/hokenjo/hokenjo-saihenhenkouten.html
			さいたま市 http://www.city.saitama.jp/www/contents/1196648448593/index.html
			川越市 http://www.city.kawagoe.saitama.jp/www/contents/1099377176676/index.html
障害や発達について気がかりのある子どもについての保護者や先生からの教育相談	県	最寄りの特別支援学校	http://www.pref.saitama.lg.jp/page/school02.html
障害を持つ子どもの相談 子どもの養育についての相談	県	児童相談所 （管轄区域は、HP参照） （さいたま市にお住まいの方は、市の児童相談所へ）	http://www.pref.saitama.lg.jp/page/jisou-annai.html
			さいたま市 http://www.city.saitama.jp/www/contents/1261630627640/index.html
障害や発達について気がかりのある子どもについての保護者や先生からの教育相談	県	埼玉県立総合教育センター （特別支援教育担当） （さいたま市にお住まいの方は、市の特別支援教育相談センターへ）	048-556-4180 http://www.center.spec.ed.jp/?page_id=394
			さいたま市 048-623-5879 http://gakkoukyouiku.saitama-city.ed.jp/sosiki/sidou2/soudansenta.html
発達障害に関する専門相談窓口	民間等	発達障害者支援センター まほろば （さいたま市にお住まいの方は、市の発達障害者支援センターへ）	049-239-3553 http://www10.ocn.ne.jp/~mahoroba/
			さいたま市 048-859-7422 http://www.city.saitama.jp/www/contents/1251183382637/index.html
発達障害等に関する診療	民間等	医療機関	http://www.pref.saitama.lg.jp/site/hattatu/#iryoukikan http://www.pref.saitama.lg.jp/page/tyukaku.html

○詳しい業務内容や相談の対象については、各機関にお問い合わせください



埼玉県のマスコット 「コバトン」